

二〇〇二年一月六日（夕拝）

大空の創造

創世記一章六節～八節

創世記一章六節～八節においては、天地創造の第二日目になされた神さまの御業が記されています。それを見てみますと、そこには、

ついで神は、「大空よ。水の間にあれ。水と水との間に区別があるように。」

と仰せられた。こうして神は、大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを区別された。するとそのようになった。神は、その大空を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があつた。第二日。

と記されています。

ここに記されている、第二日に神さまがなされた御業は、三つに分けることができます。第一は、「大空」を造られたことです。第二は、「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とを区別されたことです。そして、第三は、「大空を天と」名づけられたことです。

このうち、第一の、「大空」を造られたことと、第二の、「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とを区別されたことは一つのことです。つまり、「大空の下にある水」と、「大空の上にある水」とを区別されることによって、「大空」を造りになったとも言えますし、逆に、「大空」を造りになることによって、「大空の下にある水」と、「大空の上にある水」とを区別されたとも言えます。

いずれにしても、この御業によってできたものは、「大空」と「大空の下にある水」と「大空の上にある水」です。次に、それぞれについて見ていきましょう。

*

この「大空」と訳されている言葉は、ラーキアです。これは名詞ですが、その動詞形であるラーカアには、「拡げる」（詩篇一三六篇六節、イザヤ書四二章五節、四四章二四節）、「打ち延ばす」（出エジプト記三九章三節）、「かぶせる」（イザヤ書四〇章一九節）、「張り延ばす」（ヨブ記三七章一八節）というように、金属を打ち延ばして器にするというような意味があります。

これは、ヘブル語だけでなく、古代オリエントの言語において見られることです。このことから、しばしば、古代世界においては、大空は固くてボウル状のもので、地の上に据えられていると考えられていて、それが、古代イスラエルにおいても受け入れられていた、と主張されています。(L.I.J. Stadelmann, *Hebrew Conception of the World. Ana. Bib.*, 39, Rome: Biblical Institute Press, 1970, pp.56-60)

けれども、古代オリエントの人々が、大空は地の上に据えられた固いドームのようなものであると考えていたとしても、そして、当時のイスラエルでも、人々がそのように信じていたとしても、聖書がそのような考え方を、「取りあえず」であったとしても、受け入れているかどうかは、聖書から学ぶほかはありません。

「大空」と訳されているラーキアの動詞形であるラーカアが金属を打ち延ばすことを表わすときに用いられるということで、ラーキア(大空)も、固いものを表わしているとか、ラーカアが金属を打ち延ばして、ボウルのような形を作ることを表わすのに用いられているから、ラーキア(大空)によって表わされているものも、ボウル形の器であると考えられていたと、直ちに主張することには、疑問符をつけなくてはなりません。というのは、ラーキア(大空)とラーカアが関連する言葉であっても、ラーキア(大空)が使われていることがどのようなものであるかは、ラーキア(大空)が使われている用例から考えるべきであるからです。そのような用例が他にないときに初めて、関連語であるラーカアの用例からラーキア(大空)の意味を推測するということになります。

ラーキアという言葉は、創世記一章六節、七節、八節、一四節、一五節、一七節、二〇節、詩篇一九篇一節、一五〇篇一節、エゼキエル書一章二二節、二三節、二五節、二六節、一〇章一節、ダニエル書二章三節に出て来ます。

この言葉は、今日の私たちの「天球」という言葉のように、それ自体が、絵画的、詩的な言葉です。そして、それも、詩的な描写として用いられている場合に、「固い」とか「ボウルのような形」というニュアンスを伝えるだけです。

アンダーセンは、ヨブ記三七章一八節への注解において、次のように述べています。

地上から見る者には、空が、しっかりといて固いものに見えるものである。「科学的な」正確さということをもちだしてきて、空を詩的に「鑄た

鏡」と比較することに難癖をつけるべきではない。ヘブル人は、天の構造が、いわゆる「ひっくり返ったボウル」の構造よりも、はるかに複雑であることを、よく承知していた。(F.I. Andersen, Job, TOTC, p.267) 創世記一章六節〜八節の描写においては、神さまは、「大空」(ラーキア)は「水の間」にあって、「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とを区別するようにされました。七節に、

こうして神は、大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを区別された。

と記されていますように、神さまは「大空」(ラーキア)を打ち延ばされた(ラーカ)のではなく、造られた(アーサー)と言われています。

*

この「大空」の創造を記している記事との関連で、バビロニアの創造神話であるエヌマ・エリシュに記されていることを見ましましょう。エヌマ・エリシュでも大空の創造が「光」の後、そして「陸地」の前にあるという点で、聖書の創造の御業の記事と一致しています。(J.B.Pritchard, ed., ANET, pp67, 501-502.) エヌマ・エリシュでは、バビロニアの主神であるマルドゥクが、敵であり、海の水を人格化した怪物ティアマトを殺し、それを二分して、その半分で大空を造ったとされています。その上で、マルドゥクは、かんぬきを掛け、見張り(ガード)を置いて、ティアマトの体のうちで大空を形造るのに用いられた部分の水が逃げないようにしたと言われています。(ANET, pp67.) ある人々は、創世記一章二節で、

地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

と言われているときの「大いなる水」をティアマトに当たるものであると考えられています。今日では、そのように考える人はほとんどいないと思いますが、そのように考える人々の目からは、神さまが「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とを区別されたことは、マルドゥクがティアマトの体を二つに切り裂いたことと同じことを述べているように見えることでしょう。

しかし、このような皮相的な類似の奥には、より大きな相違があります。最も大きな違いは、創世記一章一節〜二章三節に記されている創造の御業の記事においては、造り主である神さまに敵対する存在は一つもないということです。

一章二節において、

地は形がなく、何もなかった。やみが大きいなる水の上にあり、

と書かれています。そのどれも神さまに敵対するものではありません。その意味で、ここには、ティアマトに当たる、神さまに敵対する存在はありません。

*

この、六節〜八節に記されている「大空」は、どのようなものでしょうか。

これは、今日で言うところの「宇宙空間」のことではありません。それは、この「大空」が「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とを区別するものであるという、六節〜八節の描写そのものから分かることです。

これに對しまして、一四節〜一八節では、

ついで神は、「光る物は天の大空にあつて、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。神はそれらを天の大空に置き、地上を照らせ、また昼と夜をつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。

と書かれています。

「光る物」とは、今日で言う「天体」のことです。それが「天の大空」にあると書かれています。そうであれば、「大空」は今日で言う「宇宙空間」のことではないか、と言われるかもしれませんが。

しかし、創世記一章一節〜二章三節に記されています。創造の御業の記事の理解にとつても大切なことですが、創造の御業の記事におきましては、一章二節で、視点が「地」に移されていて、二節以下に記されている記事は「地」からの視点で記されています。それで、この一四節〜一八節で書かれているのは、「地」からの視点で見たときに「大空」にあると見える天体のことを記しているわけです。

一四節〜一八節に記されていることの啓示としての関心は、今日の天文学的な知識を持つている人々だけに理解できる宇宙空間にはありません。あくまでも、「地」からの視点で見たときに「大空」にあると見える天体のことを述べています。それは、いつの時代の人にとつても共通の関心事です。ですから、一四節〜一八節の描写は、宇宙空間というものを否定しているわけではありませんが、その当時の人々が知らない宇宙空間というものを念頭に置いていない

のです。

もちろん、この広大な宇宙空間は、造り主である神さまがお造りになったものです。そのことは、一章一節の、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉から分かります。また、それと合わせて見る必要がありますが、一四節〜一八節で、「地」からの視点で見たときに「大空」にあると見える天体も、一六節に、

それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。

と記されていますように、神さまがお造りになったものであると言われていることから分かります。

これらのことから、第二日目に造られた「大空」は、今日で言う「空」のことであり、「大気圏」のことであると考えられます。

*

次に、「水」について見てみましょう。一章二節では、

地は形がなく、何もなかった。やみが大きいなる水の上であり、神の霊は水の上を動いていた。

と言われていますように、「大いなる水」が「地」を覆っていましたので、「地」は「大いなる水」の下に隠れていました。この「大いなる水」が、ここで、「大空」によって、「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とに分離されました。

さらに、第三日の御業を記している九節、一〇節で、

神は「天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と仰せられた。するとそのようになつた。神は、かわいた所を地と名づけ、水の集まつた所を海と名づけられた。

と言われていますように、「大空の下にある水」は、やがて一所に集めらるようになります。これによって、「地」と「海」が造られます。

このようにして、「地」が「大いなる水」によって覆われてしまっていた状態の中から、大気圏が造られ、今日の海と陸とが造られました。そして、これが、草や木、さらに、さまざまな生き物たちが住むことができる世界、また、「神のかたち」に造られる人間が住むことができる世界として造られていきま

す。

ですから、私たちが住んでいるこの世界は、元来、「大いなる水」によって覆われていたものであり、その「大いなる水」が「大空」によって、「大空の下にある水」と「大空の上にある水」とに分離され、さらに、「大空の下にある水」が一所に集められることによって、やっと、現われてくることができたものです。私たちが当然のように歩き回っているこの大地も、このような神さまの創造の御業のお働きによって整えられたものであり、同じ神さまの御手によって保たれています。私たちはこのことを心に銘記しておかなければなりません。ペテロの手紙第二・三章三節〜七節には、

まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。

と記されています。

*

このように、「大空の下にある水」は、やがて「海」として集められるようになる水であることが分かります。それでは、「大空の上にある水」とは、一体、何でしょうか。

これに対しては、三つほどの考え方があります。

第一は、「大空の上にある水」は、空にある「雲」のことであるという見方です。第二は、「大空の上にある水」は、「宇宙の水」のことであるという見方です。第三は、「大空の上にある水」は、ノアの時代の大洪水の前まで、地球を取り囲んでいた（とされている）、微粒子状の水の層ことであるという見方です。

第二の「宇宙の水」という見方については、今日では、宇宙には、色々な形で水が存在していることが指摘されています。けれども、それが、創世記一章六節〜八節で言われている「大空の上にある水」であると考えerことはで

きません。というのは、「大空の上にある水」は、もともと「地」を覆っていた「大いなる水」の一部であり、「大空」によって、「大空の上にある水」として分離されたものです。その意味で、この「大空の上にある水」は「地」に属する水であると考えられるからです。

さらに、先程もお話ししましたように、この創世記の記事においては、今日の天文学的な知識をもってして初めて分かるようになるものの存在に対する関心はありません。

*

第三の、ノアの時代の洪水の前まで、地球を取り囲んでいたとされている、微粒子状の水の層であるという見方は、創造科学研究所にかかわっている方々の見方で、日本の福音派の信徒の方々にかなり広まっている見方です。

この見方を採る人々は、最初に造られた時の地球は、「大空の上にある水」と呼ばれる微粒子状の水の層に取り囲まれていたので、外からやって来る有害な宇宙線の破壊的な作用から守られていたと言います。また、「温室効果」によって、地球全体の気候を一律に温暖なものにしていたと言います。それで、今日、化石となって出てくる巨大な植物や動物が存在していたことや、それが今日では寒冷地となっている所からも出てくること、さらには、洪水の前の父祖たちが、今日では考えられないような長寿であったことが説明できると言うのです。

そして、今日、この地球を取り囲む（とされている）微粒子状の水の層がないのは、ノアの洪水の時に地に注がれてしまったからであると言います。ですから、この見方では、今日では「大空の上にある水」は存在していないということになります。

これを支持するものとして、ペテロの手紙第二・三章五節、六節の、

天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。

という御言葉が挙げられています。「大空の上にある水」が分けられたことによって地が現われ、その同じ水によって滅んでしまったと言うのです。

まず、私たちが心に留めておかなければならないことは、かつて地球を取り囲んでいた微粒子状の水の層が存在していたかどうかは、今日では確かめることはできないということです。つまり、この見方は、そのようなものがあつた

と仮定することの上に成り立っているということです。

もちろん、そのようなものでも、確かに、聖書がそのようなものが存在していたということを示しているのであれば、その存在を認めなければなりません。そうしますと、先ほどの、ペテロの手紙第二・三章五節、六節の、

天は古い昔からあり、地は神のこゝばによって水から出て、水によって成つたのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。

という御言葉を、どのように考えたらいいのかという問題が出てきます。結論的に言いますと、このペテロの言葉は、「大空の上にある水」が地球を取り囲んでいた微粒子状の水の層であるということの意味するわけではありません。

「大空の上にある水」が雲であつても、同じように言えます。

これに対して、この見方を採る人々は、普通の雲では、ノアの洪水の時に「四十日四十夜」（創世記七章四節、一二節）も大雨を降らせることはできないと言います。

けれども、ノアの時代の洪水は、終末のさばきを予表する神さまの特別な御業による出来事です。その時、今日知られている自然法則を超える出来事が起こつたであろうことは、十分、考えることができます。

さらに、重大な反論があります、創世記九章一三節～一五節に記されていますように、神さまは、洪水の後に、ノアを通して契約を与えてくださり、

わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を起こすとき、虹が雲の中に現われる。わたしは、わたしとあなたがたとの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い出すから、大水は、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水とは決してならない。

と言われました。

まず確認しておきたいことは、神さまがこのような契約を与えてくださったのは、ノアの時代の後にも、再び大洪水は起こりえるけれども、神さまがこの契約のゆえに、再び全ての生き物を滅ぼすような大洪水を起こすことはなさないということを約束してくださつたものであるということです。このことを踏まえて、かりに、この「大空の上にある水」が地球を取り囲んでいた微粒子状の水の層であるという見方が正しいとしましょう。そうしますと、ノアの時代の洪水によって、地球を取り囲む微粒子状の水の層がなくなつてしまつた

ので、もう、大洪水は起こりえない状況になったということになります。そうであれば、わざわざ、ノアを通して、このような契約を与えてくださるまでもなかつたわけです。

*

先に触れましたように、この「大空の上にある水」が地球を取り囲んでいた微粒子状の水の層であるという見方を採る人々は、洪水の前の父祖たちが、今日では考えられないような長寿であつたことに注目します。そして、それは、ノアの時代の大洪水の前の地球が、微粒子状の水の層に取り囲まれていたために、外からの有害な宇宙線の破壊的な作用から守られており、「温室効果」によって、地球全体の気候が一律に温暖なものであつたからであると言います。

また、この見方を採る人々は、これと関連して、初期の地球に巨大な植物が繁茂しており、巨大な生き物が生息していたことにも注目しています。それも、ノアの時代の大洪水の前の地球が、微粒子状の水の層に取り囲まれていたために、外からの有害な宇宙線の破壊的な作用から守られており、「温室効果」によって、地球全体の気候が一律に温暖なものであつたからであると言います。けれども、このことにも、問題があります。

初期の地球に巨大な植物が繁茂しており、巨大な生き物が生息していたことについては、聖書に記述がありません。（このことにつきましては、後で簡単に触れます。）それで、聖書から直接的に論ずることはできません。ここでは、洪水の前の父祖たちのことだけをお話しします。

確かに、創世記第五章に記されている、洪水の前に生きていた父祖たちの寿命は、九百年前後です。これに対して、創世記一章一〇節〜二六節に記されている、洪水の後に生まれた父祖たちの寿命は、せいぜい、四百数十年です。ですから、洪水を境にして、父祖たちの寿命がほぼ「半減」していることが分かります。このことは、大洪水の前の地球が、微粒子状の水の層に取り囲まれていたということを支持するのように見えます。

しかし、もう少しよく見てみますと、洪水の後、父祖たちの寿命は、もう一度「半減」しています。創世記一章一〇節〜二六節には、

セムは百歳のとき、すなわち大洪水の二年後にアルパクシャデを生んだ。
セムはアルパクシャデを生んで後、五百年生き、息子、娘たちを生んだ。

アルパクシャデは三十五年生きて、シエラフを生んだ。アルパクシャデはシエラフを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。シエラフは

三十年生きて、エベルを生んだ。シエラフはエベルを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。エベルは三十四年生きて、ペレグを生んだ。エベルはペレグを生んで後、四百三十年生き、息子、娘たちを生んだ。ペレグは三十年生きて、レウを生んだ。ペレグはレウを生んで後、二百九年生き、息子、娘たちを生んだ。レウは三十二年生きて、セルグを生んだ。レウはセルグを生んで後、二百七年生き、息子、娘たちを生んだ。セルグは三十年生きて、ナホルを生んで後、二百年生き、息子、娘たちを生んだ。ナホルは二十九年生きて、テラを生んだ。ナホルはテラを生んで後、百十九年生き、息子、娘たちを生んだ。テラは七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ。と記されています。

この記録から分かりますように、洪水後の父祖たちの寿命は四百数十年でした。しかし、一八節に記されているペレグ以後の父祖たちにおいては、二百数十年になっています。

この寿命の半減は、一体何によったのでしょうか。それを理解する鍵は、創世記一〇章二五節に、

エベルにはふたりの男の子が生まれ、ひとりの名はペレグであった。彼の時代に地が分けられたからである。

と記されていることです。

「彼の時代に地が分けられた」と言われていることから分かりますように、ペレグの時代に、創世記一章一節〜九節に記されている、バベルにおけるさばきが執行されたのです。それによつて、地球環境に劇的な変化があつたわけではなかつたのですが、父祖たちの寿命は半減しています。ですから、人間の寿命は、神さまのさばきによつて短くなつたのであると考えられます。その意味で、ノアの時代の大洪水によるさばきの後の寿命の半減も、地球を取り巻くとされる微粒子状の水の層が無くなつたためであると、考えなければならぬわけではありません。

*

これらのことから、「大空の上にある水」が地球を取り巻く微粒子状の水の層であるとする説を積極的に支持するものではありません。言い換えますと、ノアの時代の大洪水以前には、地球を取り巻く微粒子状の水の層があつたと考えなくてはならない理由はないということです。

さらに、創世記の記事は、神さまの創造の御業の全てを記しているのではありませぬ。それは、その記事を読む人々にとって意味あることを記しています。それによって、私たちが、自分の住んでいるこの世界と自分自身を造り主である神さまとの関係において理解し、自分たちの存在の意味を理解するための土台、あるいは、原理を把握することができるようにしているのです。

ということとは、創世記の記事は、ある特定の時代の人々にしか知ることができないようなことは、取り上げていないということです。たとえば、先ほど触れました、初期の地球に繁茂していた巨大な植物や、恐竜などの巨大な生き物のことなどが書かれていないのは、それらの存在が、その当時の人々に知られていなかったからです。そのようなものを記せば、無用な混乱を増すだけです。地球を取り巻くとされる微粒子状の水の層の存在も、その時代の人々に知られていたわけではありませんし、今日でも知られていません。

それで、「大空の上にある水」は、今日で言う、「雲」のことであると考えると、一番すつきりします。

ところが、「*McCoy* ヤングは、大空の上の水が雲を指しているという見方は、水が大空の「上にある」ということを正当に扱っていない、と言っています。

——ただし、ヤングは、ノアの時代まで地球を取り巻く微粒子状の水の層があったという説を採ってはいません。（*Studies in Genesis One*, p.90, n.94）

けれども、たとえば、詩篇一四八篇四節では、

主をほめたたえよ。天の天よ。

天の上にある水よ。

と言われています。この「天の上にある水」は、広く人々に知られている「天の上にある水」です。そして、この詩篇が記されたときにも存在している「天の上にある水」です。それで、それは、雲のことを指していると考えられます。そうであれば創世記一章六節〜八節に出てくる「大空の上にある水」も、雲のことであると考えることができます。

ここでも、「大空の上にある」ということで、今日の天文学的な知識を持っている者の発想や感覚を持ち込まないようにしなくてはなりません。今日では、地球も宇宙の小さな惑星の一つでしかないことが分かっています。そのような者の感覚では、「大空の上にある」と言えば、地球の外のような感じがします。

そして、雲は、それよりか、地球の近くに発生するものであるような感じがし

ます。けれども、その当時の人々の感覚では、雲は、天高くあったことでしょ
う。

いずれにしましても、創世記一章六節〜八節の「大空の上にある水」は雲の
ことであるという見方で、何か不都合なことが生じることはありません。そう
であれば、そもそも、その存在があったかどうかも分からない、地球を取り巻
くとされる微粒子状の水の層があったということ想定する必要はありません。